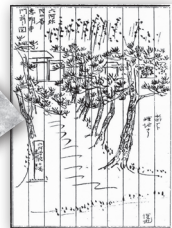
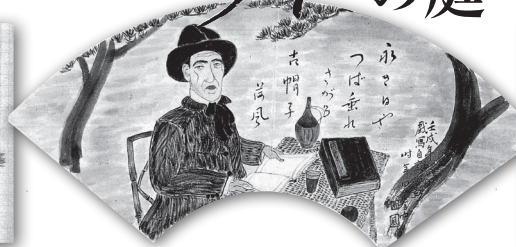
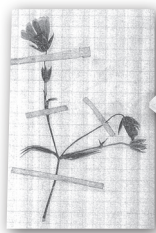


荷風の庭



荷風の文芸空間に“理系感覚”という一本の補助線を引いてみる

訪問者 坂崎 重盛

荷の葉や千年わたる風にゆれ

「異色」の大作家・永井荷風の文芸を「理系感覚」また「ナチュラリスト」としての側面から、彼の成した文芸世界を気の向くままに訪ねてきた。

「異色の作家」などと称するのは、あまりに陳腐のようだが、たとえば文化勲章受章者(昭和二十七年、七十三歳)でありながら、荷風には、いまだに資料館、文学館の一つも存在しないという事実が、言外、その「異色ぶり」の証しではないだろうか。

鷗外、漱石、谷崎は、もちろん、それぞれ立派な施設をもち、その文芸活動が多くの資料展示とともに顕彰され、来館者に供せられている。また全国でも、その地の出身者の小説家、詩人、歌人等文芸家、美術家等の資料館、記念館は数多くある。

しかし荷風に至っては、何度かの立派な企画展は催されたものの、なぜか今日に至るまで、それらの施設が設けられぬまま放置されてきた。いま、なぜか、と記したが、この件に関しては、ほくはかねてから「邪推」している。つまり、公の機関や団体にとって、荷風はなかなかやっかいな作家だからではないか。



中公文庫、野口富士男『わが荷風』(昭和59年)。野口富士男の実証精神はすさまじい。とにかく荷風の事跡をたずね歩く、歩く。また荷風描く狭斜の地の女性への野口のまなざしが優しい

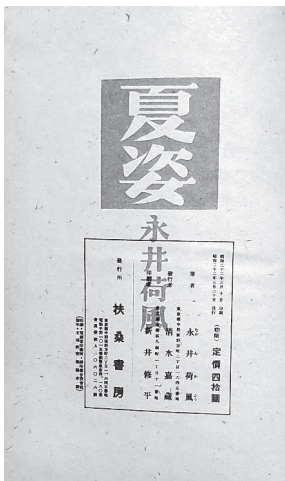
作家・野口富士男は『わが荷風』(中公文庫)で、戦後の荷風の生き様に関して、

「芸術のなかでも、文学、文学のなかでも小説ほどなまぐさいものはあるまいが、荷風はそれを自己の一身に具現した。文学の老醜と文学者の老醜を、近代日本の作家たちのうち荷風以外の誰が私たちにみせたか」と語り、また同じく岩波文庫の『荷風随筆集』(下の解説で、『葡萄棚』にふれながら、

「人によってはげがれた女としか見ないはずの浅草の売笑婦——もときつい言葉でいえば淫売婦をこれほど美しく書いた作家が、日本に限定することなく、世界文学史上に一人でもいたであろうか。寡聞にして、私はそういう例を知らない」という、じつに感動的な一節をもって、この解説文を閉じている。

荷風散人の代表作といえは、一般にはまず『濶東綺譚』が挙げられるだろう。この作品は、画家・木村荘八の挿画史に残る挿し絵とあいまって、多くの荷風ファンを生んだ、日本の近代文学史に残る傑作だが、描かれたその世界は東京の片隅の瀬東、原色のネオンまたく迷路からなる売笑の地に生きる女性との交渉をつづった小説である。

もともと荷風は、そのデビューのころから発禁の作家であった。『ふらんす物語』『歓楽』とつづけて発禁処分を受けた後も、『夏すがた』が発禁、他の作品も時の官憲からにらまれる世界を描くことが多く、散人自身も、それをおそれて、ときに私家本として作品を発表せざるをえない境遇にあった。荷風は「札つき」の小説家なのであった。



昭和22年、扶桑書房刊の『夏姿』。大正4年、初山書店版はただちに発禁処分に。戦後の、この扶桑書房版で初めて公に。特漉紙を表紙に、貼り題簽、と物資の乏しい時代に精一杯の造本が愛しい